

エコたま グリーンNEWS



多摩市民環境会議機関紙 第131号(通巻第191号) 2014年8月14日発行 発行人: 清水武志朗
編集人: 井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山3-9
東永山複合施設301(事務局員は常駐していません)
e-mail qqh43tdd@train.ocn.ne.jp
URL http://ecomeetingtama.blog.ocn.ne.jp

多摩川源流+登山、ニジマス取り体験



急流の岩場を必死になってよじのぼる 男子11名の計19名。そして付き添いのボランティア・スタッフは11名。

例年と同じく聖蹟桜ヶ丘駅を午前7時20分ごろ出発。京王線とJR南武線、青梅線を乗り継いで奥多摩へ。そこからチャーターしたマイクロバスで山梨県小菅村の多摩川源流研究所へ。これが10時30分ごろ。

ここでハプニング。いつも昼食をとっていた研究所の1階が「村役場」と化していたのだ。現在、本物の役場を建て替えているため、ここが臨時の代替施設になっているのだとか。だから、村民もよく出入りしている。参加者たちは研究所の2部屋で昼食をとるとともに、溪流体験に向けての着替えなどを行った。



滝の前にある深みに飛び込む

最後は滝(堰堤)の前の飛び込み台から、何度も水のなかに飛び込み、ここまでの苦しかったストレスを一気に晴らす。1日目はそんな体験だった。

小菅村でも上野原市に一番近い地域にある寺子屋自然塾に泊った一行は、2日目は多摩川の最初の一滴がしたたる室のある場所を見に、笠取山の登山だ。ほぼ2時間かけて昼食場所である笠取小屋に着き、おにぎりの昼食を取っていたところ空模様があやしくなり、あっという間に降雨とともに雷鳴まで鳴りだす。



ここで笠取小屋では急きよ、避難小屋のカギをあけ、

多摩市水辺の楽校主催の「多摩川源流体験サマーキャンプ」が今年も8月1日～3日に開催された。参加したのは小学校高学年の女子8名、

登山者たちに開放してくれた。おかげで参加者たちは強雨に打たれることもなく、雷雲が去るまでの30～40分間を屋内で過ごすことができた。



遭遇したニホンジカ

この日のハプニングは、「野生鹿」(西さんはバンビと命名)との遭遇。のぼりの中途でも出会ったが、帰りも行き近くの場所にその鹿が現れ、なんとこちらの行列のあとについて歩いてくる。こちらが休憩していると、ほぼ7～8mほどの距離を保って当方の集団を見ている。子どもたちのにぎやかな声が好きなのかも。

3日目はニジマスのつかみ取りと、はらわたを処理するさばき、そして塩焼き。自然塾から歩いて10分ほどの御鷹神社の裏の鶴川に、前後を石や網で囲った場所を設け、そこに小菅村で養殖していたニジマスを放流し、子どもたちが素手でつかまえる。なかには「かわいそうだから」といって、一度つかまえたニジマスを水のなかに放す子もいた。

さばきについては自然塾の前管理人だった森重さんが、小刀で魚の尻部から刃先を入れ、それを頭のほうまでもってきて腹を裂き、最後にわた



ニジマスのつかみ取り風景を全部切り取って水洗いするところまで教えてくれる。

こうして自然塾に運ばれた収穫物は、今度は竹の串に刺し、必要な部分に塩をまぶして塩焼きにする。

これは参加者たちが昼食のときに一匹ずつ食べるとともに、ひとり2匹ずつ家におみやげに持って帰れるように準備された。3日夕、多摩市に帰宅した子どもたちによるつかみ取りの様子の自慢話とともに、家族らには小菅村の味わいがしっかり届けられたことだろう。



ニジマスが焼けるのを待つ子

さえずりの森の「自慢植物」観察会

永山駅西口前にあるさえずりの森では、夏のお盆前になるとキツネノカミソリとバアソブが満開になる。キツネノカミソリは東京都が咲いている場所を探しており、それなりに少なくなっている植物。そしてバアソブは都内ではここにしか咲いてないといわれるほど貴重なもの。



キツネノカミソリの群落

今回は8月7日(木)に観察会を行ったところ、なんと船橋市からバアソブ・ファンがやってきて、地元の保全育成の会の会員たちと交流した。(会員6名、外部5名)以前には岡山のほうから新幹線で来たファンもいたほど。

→バアソブ

気になるのは、バス通りに面したフェンス際のキツネノカミソリは咲いているのに、以前咲いていた谷沿いのところにごく少数しか見られなくなったことだ。



多摩からエネルギーと幸せについて考える(中)



1955年以降は圧倒的に石油の消費が増えており、それで日本は急激な成長を遂げる。高度成長期は石油の安いエネルギーを使った。それが、その後どうなったか。

1990年代以降、エネルギー消費量がずっと増えるから何らかの対応をしなければ、といわれたが、じつはエネルギー消費量は伸びていない。今後も伸びないだろう。

バブル時期によって失われた20年+3.11によって、エネルギーは再び「自らの地域の資源によってつくるもの」といった概念が変わった。

日本ではエネルギーが生産できない「エネ小国」だと思われているが、じつは1935年のエネ輸入量は18%で、80%余は自給できていた。絶対的に使っている量が少ないという事情もあったが、とりあえず自給できていた。

その後のエネルギー輸入は1955年に28%、60年になると45%。このへんから「エネ小国」となっていくわけで、それは高度経済成長期以後のことになる。

最近「ご当地エネルギー」という言葉をよく聞く。地域で自分たちが、エネルギーをほしいと思っている人が、自分たちでつくる時代になってきている。だから、ずっと以前の小水力がはやった頃に返ろうとしている。

エネルギーも供給する側によってB(ビジネス)toB、C(コンシューマー)toCに分かれるのではないか。いままでのエネルギーはBtoBまたはBtoCしかなかった。そこにCtoCが出てきた。

※BtoBエネルギー：・産業、大規模インフラ用の大規模な発電・送電・配電という従来型事業。

CtoCエネルギー：・「ご当地エネルギー」(地域循環型の生活者エネルギー)・地域の市民、事業者、農家、金融機関、行政のネットワークで行う・六次産業化、中山間地の活性化、漁港のエコ化など地域再生の柱としての自立型生活者エネルギー・北海道から九州まで、ご当地エネルギー事業者が急増している。

再生可能エネルギーの市場拡大には、社会の認知度、許容度を広げることが不可欠だ。たんに省エネだけでなく、自給できる、よそから石油を買ってこないなどエネルギー安全保障のメリットも大事。そして持続可能な社会のためには、ふたつのエネルギー循環を回していくことが必要だと思う。

そのひとつは、従来の電力システムを改良して、産業、大規模インフラ用に必要な電力をまかなう大規模な発電。新規参入を受け入れ、競争原理を導入する。それによって多様な事業者が参入するが、事業をバックアップする金融の仕組みの整備も必要となる。

ふたつ目は、新たな電力システムとして地域循環型の地域支援エネルギー。地域の市民や事業者、行政が主体になって行う。参入者・賛同者を増やすために、各地域で情報発信、認知度・共感度のアップが必要。



たとえば、秋田では海岸線にずっと風車を立てようという計画がある。秋田大学や秋田銀行が連携し、地元の産 2号目の発電所・ゆいま〜る屋上業界では風車の部品をつくろうと研究している。秋田県では「あきた小町」の出荷額とエネルギーの購入額がほぼイコールなのだそう。だからエネルギーの何割かが自給できるようになると、そのお金が地域で回せるようになる。地域経済と環境面、さらに今後は安全保障という面でも自然エネ、自立エネが重要になるということ。

では、自然エネルギー導入に向けてだれが何をすべきなのか。まず再生エネ育成に必要なものは、①柔軟な電力市場、発送電分離、独立事業者=発電したい人が発電して、電気のユーザーは発電者を自由に選べること、②行政、産業界、市民、金融機関のコラボレーションだ。

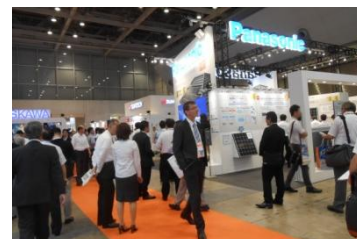
だれが何をするのか。①産業界はメガソーラー、ウインドファームなど中〜大規模で、収益の出る企業の事業として参入する。環境も大事だが、ビジネスとしての採算性が重要になる。②これに投融資する金融機関・投資家などは中〜大規模事業に向け、信頼性のある金融商品としての品質が重要になる。たとえば、メガソーラーなどは年金基金の運用先などにもなっている。

③では自然エネルギーの場合。市民や個人投資家が市民発電所などに小規模なマイクロ投資をする。コミュニティ、地域の自立型エネルギーであり、環境や地域活性化としての価値が高い。エネルギーという自分たちの役に立つものをつくるという役割が生まれてきた。(大和総研・主席研究員の河口真理子さんの講演から：次号につづく)



日本最大の太陽光発電の展示会開催

一般社団法人太陽光発電協会(JPEA)主催の「PVJapan」が7月30日から8月1日まで東京ビッグサイト西ホールで開かれた。この展示会は太陽光発電に関する産業面と学術研究面、



多くの来場者でにぎわった会場。外国を含む行政関係など幅広い関係者が一堂に集まり、国内外に対する情報発信と交流を行う場になっている。今回で7回目になるが、年々、出展者が増え、今年は160社/団体。出展小間数も585小間と急増している。

日本の太陽光発電市場は、2012年7月に施行された再生可能エネルギーの固定価格買い取り制度を機に、急激な勢いで成長している。市場も個々の製品にとどまらず、様々なシステムやサービスが幅広く展開され、全体が拡大を続けている。ただ、買電する側の電力会社の送電線容量が不足するなど課題が頭をもたげてきている。

この展示会場では国内外の太陽電池メーカー、関連製品メーカー、製造装置メーカー、部品・材料サプライヤー、大学・研究機関など、太陽光発電屋根と一体型のパネル電や風力、小水力など再生可能エネルギーに関わる幅広い分野から新製品・新技術などが展示されていた。

